



## 第30回オリンピック競技大会(英国・ロンドン)

今回で30回目となる五輪。英国・ロンドンの地で、トビウオジャパンは目覚ましい活躍を見せ、過去最高のメダル11個を獲得。メダリストたちの表情と声をお伝えします!

文/折山淑美、本誌編集部 写真/フォート・キシモト



# 鈴木聡美

100mで銅メダルを獲得してからは一気に勢いづいた。終わってみれば、今大会、個人で最も多くメダルを獲得したのは、入江と鈴木のみだった

**銀** 200m平泳ぎ  
2分20秒72  
(NR9イ)

**銅** 100m平泳ぎ  
1分06秒46

**自分の力を信じた  
「笑顔」が強さの秘密**

本当初出場なのだろうか、と疑いたくなるほど、眼が据わっている。すでに入場のときから、良い結果が生まれるのではないかと、期待させる。名前をコールされて笑顔で手を振るその姿からは、心から「楽しい!」という鈴木への期待が、ひしひしと伝わってくる。スタートのアクシデントはビックリしたが、逆に緊張がほぐれた」という100mで、周りも自分もビックリの銅メダルを獲得。レース後も終始笑顔だった鈴木は、3日後の200mで大仕事をやってのけた。

準決勝で世界記録を樹立したレベッカ・ソニ(アメリカ)のハイペースについていき、150mを身体1つ差の2位で折り返す。ラスト50m、ユリア・エフィモワ(ロシア)の追撃を0秒2でかわし、2分20秒72の日本タイ記録で銀メダルを獲得。競泳日本女子では初となる個人で2つのメダルを手にして、「そんなすごいことをやってっちゃんですわね!」と笑いながらも、「後半伸びたのが一番の成長かなと思えます」と冷静に分析することも忘れない。これで日本女子のエースです、との問いかけには「これからもチャレンジャーでありたい」と答えた鈴木。次は表彰台の一番上で、彼女の笑顔が見られることを期待したい。

過去最高数のメダルを獲得した

# ニッホンのチカラ



# 入江陵介

100mも200mも持てる力を出し切り、目標としていたライバルには先着したものの、ブーマークだった選手にやられた。この借りは、フラジールで返す

**銀** 200m背泳ぎ  
1分53秒78

**銅** 100m背泳ぎ  
52秒97

文/折山淑美

**今大会を糧にして  
悔しさは1年後に晴らす**

4月の日本選手権後は喘息が出たり左肩を痛めて腕がしびれる状態になったりと、ギリギリで五輪に間に合ったという状態の入江陵介。後半勝負にかけた100m決勝では、世界王者カミーユ・ラクル(フランス)を目標に泳ぎ、最後は差し切った。だが、マンのアメリカ勢が先着して3位。それでも「五輪のメダルは特別。52秒97のタイムは正直遅いが、3位になったことを素直に喜びたい」と納得した。

その3日後の200mは、ライバルのライアン・ロクテ(アメリカ)を徹底的にマークした。間合いを測ったように、きっちり0秒2百のタイム差をキープして150mを折り返す。

「落ち着いてラストスパートをできたし、今できる100%のレースができただ」という入江は最後でロクテを6秒16差で抑えた。しかし、ロクテの向こうにいた4コースのタイラー・クラリー(アメリカ)が後半を57秒40でカバーしていて、結果は2位。

「金メダルを狙っていたのですが、残念でした。でも五輪で自分のレースに微することができたし、ロクテに勝つのは収穫。自分の五輪はこれで終わりにやらないですから」と、リオデジャネイロ五輪での雪辱を誓った。

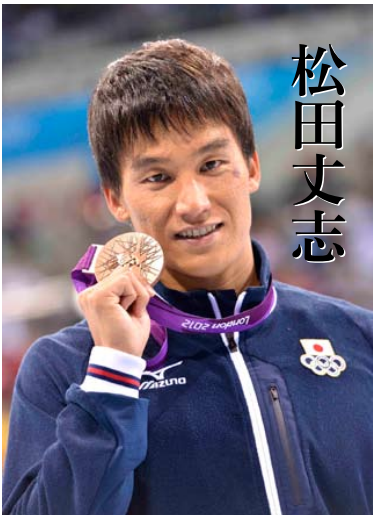


文/折山謙美

### たったひとつの誓いのために 壁を乗り越えた達成感

北京五輪で銅メダルを獲得したときから、心の中に芽生えた。打倒マイケル・フェルプス（アメリカ）の誓い。だが北京後は、所属先がなかなか決まらずに「もう五輪を目指せないのかな」と、思い悩む時期もあった。そんなときでも彼を諦めさせなかったもののひとつが、その誓いだった。

4月の日本選手権後はラストの強化を目標する、二冠を追う試みをした。そこでまずなければ、フェルプスを超えなければならないと考えたからだ。満を持しての戦い。松田は前半から競りかけて、100m通過では0秒48差。それを徐々に縮めてラスト50mにかけたが、0秒20だけ足りなかった。さらに1分52秒96で泳いだ20歳のチャド・レックス（南アフリカ）にフェルプス超えを先んじられたのだ。それでも「トップと0秒25差は悔しいが、北京以来4年ぶりに快心のレースができた達成感もある」と、4年間の戦いに区切りをつけた。再度敗れたとはいえ、松田はロンドンで、ひとつの山を乗り越えたのである。



## 松田丈志

銅 200mバタフライ  
1分53秒21

自分色のメダルから4年。今回も自分色になったのだろうか。それとも、山を越えた先に、まだ進むべき道を見つけたのだろうか

## 星奈津美



銅 200mバタフライ  
2分05秒48

事前のランキングなど当てにならない現実に苦しみながらも、満足のいく笑顔を見せてくれた星。自分を信じて戦い続けた彼女に拍手を送りたい

### プレッシャーとの戦いを 乗り越えた納得の銅

200mバタフライの表彰式。首から下げた銅メダルを、本当に大切そうに触り続ける。星奈津美の姿があった。「はじめてかけてもらって、こんなにメダルって重たいんだなって思いました」。

4月の日本選手権で、2分04秒69という驚異的な日本記録を樹立し、世界ランキング1位でロンドンに乗り込んだ。だが、直前の合宿でも、ロンドンに入っても調子が上がらない日が続く。「あのタイムはまくれだったのかな、と思ったときもありました」というほ

ど、不安を抱えていた。ランキング1位というプレッシャーもあった。そんな星を支えたのは、周りのコーチやトレーナー、そして家族だった。トレーナーには、「レース終わることに状態が良くなっていると言われ、コーチからも泳ぎは悪くない」と太鼓判を押され、星自身も少しずつ前向きになっていった。そして迎えた決勝では、ほぼ日本記録と同レベルを刻み、2分05秒48で銅メダルを獲得した。「ラストはせうしてもいばん良かったときまで上げられませんでした。正直しんどかったですけど、諦めないで最後まで泳ぎました。最初から最後まで、自分らしいレースをやり遂げたので、満足しています」。



## 寺川綾

銅 100m背泳ぎ  
59秒83  
(NR)

誰もが待ちに待った。彼女の笑顔。いとおしそくにメダルを持ち上げる寺川の表情からは、8年越しの想いがひしひしと伝わってきた

### 的確な戦略でつかんだ 8年越しのメダル

涙が止まらなかった。「目標としてきたメダルの色は違うけど、良い雰囲気です。レースに臨めたので最後の瞬間に平井（伯昌）コーチの顔と、言われ続けていたタッチをしっかりとやることを思い出して、支えてくれたみんなにありがとうって伝えたい」。栄光と挫折を味わった8年間。09年には、続けることを決めたにも関わらず、自分でも気づかないところで決める場所を探していた。しかし「本人がメダルを狙えようだな」と気持ちがあれば、自然と人間は変わっていく。

と平井コーチが話すように、結果を残していくにつれて、寺川は自然と自信と強い精神力を身につけていった。迎えた100m決勝。予想通り75mの時点で5人がほぼ横一線に並ぶ混戦。「ラスト15mでスパートをかけるプランだった」という寺川のどつきが上がる。4月の日本選手権のときから課題としていたタッチを決めると、電光石火には「3」の文字が光る。2位との差が0秒15、4位との差は0秒17。狙い通り、タッチでもぎ取った銅メダルだった。メダルをかけてみてどうですか？という問いに、寺川は涙声でこう答えた。「いろんな思いが詰まり過ぎていて、重いです」。

### 大きな壁を乗り越えて 手にした栄冠

何度もガッツポーズを繰り返す姿が、そこにあった。200m平泳ぎの決勝、1コースだった立石諒は落ち着いて、隣の北島康介が100mを1分01秒40という、世界記録を上回るハイペースで折り返す。立石は、その北島に遅れること0秒87の1分02秒27でターン。「前半はしっかり抑えて、後半に良い泳ぎをしよう」と、100m〜150mのラップで世界記録を樹立したダニエル・キユルタ（ハンガリー）をも上回る、32秒54でまとめて3位に浮上すると、ラスト50mでも粘りを見

せ、タッチで北島をかわして3位。思い通りのレースを展開し、つかんだ銅メダルだった。「ここに来るまでに何回も水泳をやめようと思ったし、苦しいときもいっぱいあったけど、本当に諦めないで良かった」。周りからは「北島2世」と言われ続け、天才との呼び声高かった立石だが、昨年の世界選手権では決勝にも残れず、北島を超えることもできなかった。しかし、五輪という大舞台で北島という大きな壁を乗り越え、メダルを手にした。キユルタとの1秒差は大きいですが、でも少しずつ差を縮められたら」と話す立石は、次のステージへ進み始めた。



銅 200m平泳ぎ  
2分08秒29

北島にワントンを遅れて電光掲示板を確認した瞬間、一気に感情を爆発させた。苦しみ抜いた4年分の想いがあふれ出す





**銅** 女子4x100m  
メドレーリレー  
3分55秒73(NR)  
(寺川58秒99・鈴木1分05秒96・  
加藤57秒36・上田53秒42)

写真右から、寺川綾・鈴木聡美・  
加藤ゆか・上田尊佳

前評判を覆してメダルを獲得した  
若い選手たちが目を惹く。北島  
選手は、日本女子の強さを見せつ  
つた素晴らしいレースだった

### 4人の絆がむいた 銅メダルへの道

シドニー五輪から12年。ふがない  
と言われ続けていた日本女子チームに  
ようやく光が見えた瞬間だった。  
「チームでメダルを獲るのは特別なこ  
と」という寺川綾が、58秒99で予定通  
り位で引き継ぐ。絶好調の鈴木聡美  
は、1分05秒96という驚きのタイムで  
加藤ゆかへバトンタッチ。「この4人  
だったからメダルが獲れたのだと思

う」と話す加藤。個人で振るわなかつ  
たらうぶぶんを晴らす57秒36で、アン  
カー上田尊佳へ3位で引き継ぐ。最後  
は、ロシア、中国との勝負。ロシアのベ  
ロニカ・ポポワが飛ばして3位で浮上  
し、日本は4位。「冷静に、最後の15  
mをバチないように自分のレースを上  
るだけだと思っていました」という上  
田は、ここから本領を發揮。メダルは  
敵しいか、と思わせたが、ラスト25m  
でロシアを抜き返して、最後は0秒30  
差で逃げ切った。



## 過去最高のメダル獲得数の裏に見える課題

過去最高数となる11個のメダルを獲得  
した日本。金メダルは0だった。銀  
メダル3つ、銅メダル8つは素晴らしい  
結果である。メダル0に終わった  
アトランタ五輪以降、シドニー、アテ  
ネ、北京、そしてロンドンと、徐々に  
日本のレベルの底上げができていた証  
拠。個人的にだが、銀、銅メダルが多  
いことは、地力がある証拠だと考えて  
いる。ほとんどのレースは、2、4位  
までが混戦である。そのコマ数秒の  
戦いを制するためには、本物の実力が  
必要だ。さらに、メドレーリレーとい  
う4種目で力のある選手がそろわない  
と結果が出ない種目で、メダルを獲得  
したことも、日本チーム全体に実力が  
あることを証明した。

しかし、手放して喜ばない事実もあ  
る。昨年の上海世界水泳選手権でも同  
様だったが、2回以上泳いだ準決勝  
以上出場選手18人（個人に限る）の  
うち、タイムを落とした選手が9人  
上田尊佳、松島菜菜、渡部香生子、加  
藤和、伊藤華英、高桑健、堀畑裕也  
渡邊一樹、そして北島康介までもが、  
2回目、もしくは決勝でタイムを落と  
してしまっている。

さらに、自己ベスト率がかなり低い。  
ベストを出したのは、代表選手27人

中、寺川綾、鈴木聡美、萩野公介、渡  
邊一樹の4人で泳いでいた選手もいた  
し、仮に自己ベストだったらもっとメ  
ダルが増えたのか、という話でもない  
だが、いつまでも自己ベストが高速水  
着時代の記録だから、という言い訳は  
通用しないし、大舞台で実力を發揮す  
る精神力を身につけなければならぬ。  
今大会では合計8つの世界記録が出て  
おり、高速水着の時代など、すでに過  
去なのである。

鈴木聡美が200m平泳ぎで、金藤  
理絵が09年に高速水着で出した2分20  
秒72と同記録を出したとき、神田忠彦  
コーチはこう話した。「私自身も、こ  
の記録はもう無理なんじゃないかとい  
う印象もありましたが、本当に選手鈴  
木がよく頑張ってくれた。変な先入  
観とていうか、そういう時代を意識して  
いないから、彼女はここまで記録を伸  
ばしたんじゃないかな」

日本チームに最高の流れを持つてき  
た萩野公介も、そのひとり。この2人  
に共通しているのは、大舞台に全く臆  
せず自分のレースをできたこと。この  
精神力が、今大会で獲得できなかった  
金メダルにつながる道になるだろう。  
（本誌編集部・田坂友晴）



**銅** 400m個人メドレー  
4分08秒94(NR)

最初の種目で日本チームに勢いをつ  
けたのは、間違いない萩野だった。  
フェルプスを下しての3位は、彼ら  
にとって素晴らしい経験となるだろう

## 萩野公介

初出場の五輪にも、17歳の高校生・  
萩野公介は、なんら臆することもな  
かった。大会初日に日本選手のトップ  
バッターとして出場した予選では「予  
選からすごい声援だったので、五輪つ  
てこんなところなんだと思って楽し  
ながら泳ぎました」と、いきなり4分  
10秒01と日本新と叩き出した。それ  
で「最後の自由形はもっと上げられると  
思う」と事も無げに言ったが、夜の決  
勝でその言葉が嘘でなかったことを証  
明した。

4コースで泳いだ萩野は最初のパタ  
フライを予選より0秒84速く入ったが、  
300m通過は逆に0秒16遅れた。し  
かし最後の自由形は予選より1秒以上  
も速い58秒20でカバーして、4分08  
秒94と日本新記録を連発したのだ。自由  
形ではフェルプスを0秒12突き放し  
ていた。「300mをターンしたとき、  
フェルプス選手が僕より後ろのほうに  
が見えて、調子が悪いのかなと思っ  
たけど、それよりも前にいたベ  
レイラ選手についていこうと  
思ったのに、追いつけなかつ  
たのが悔しい」。

学童記録を出した選手は、大  
成しないというジレンマを、  
軽々乗り越えた本物の逸材で  
ある萩野は、五輪という舞台  
を楽しむながら、次の大き  
な期待を私たちに持たせてく  
れた。

文/折山謙史

### 次世代のエースが魅せた 冷静に世界と戦う姿勢

1泳の人江陵介は、個人  
レースを上回る52秒を出し、  
2位で北島に引き継ぐ。その  
北島が最高の引き継ぎを見せ、  
浮き上がりで頭ひとつリ  
ード。焦ったアメリカのブレ  
ンダン・ハンセンが前半飛ばし  
てラップを奪うも、後半にツ  
ケが回って北島が200mの  
ラップを奪う。ガッツポーズ  
をした北島から引き継いだ松  
田も、51秒20という好タイム  
で藤井拓郎に託す。藤井も粘りに粘っ  
て、最後はオーストラリアのジェ  
ム・マグナッセンを振り切り、銀メダ  
ルを獲得。引き継ぎがあるとはいえ、  
全員が個人で泳いだ記録を大幅に上  
回る、素晴らしい泳ぎを見た。その原  
動力は、レース後に北島が語った言葉  
に集約されている。

「一人ひとりが役割を分かっている、  
二人ひとりが自信を持っている。本  
当に良いチーム。このメダルは、チーム  
が一丸となって戦った結果です」。

### 日本が見せた底力 団結力と執念の泳ぎ

「康介さんを手ぶらで帰らせるわけに  
はいかない」。その想いがメドレーリ  
レー初の銀メダル獲得へつながった。  
日本は、2泳の北島康介の時点でも何位  
につけているかがカギだった。アテネ  
と北京でメダルを獲得したときは、自  
由形以外の3種目でファイナリストか  
メダリストを擁していたが、今回は2  
人。苦しい戦いが予想されていた。



**銀** 男子4x100m  
メドレーリレー  
3分31秒26  
(入江52秒92・北島58秒64・  
松田51秒20・藤井48秒50)

写真右から、入江陵介・北島康介・  
松田有志・藤井拓郎

27人のトビウオジャパンがー丸と  
なり、つかみ取った銀メダル。北島  
康介が、誰よりも、何よりもうれし  
そうにしていたのが印象的だった



街中を走るタクシーまで、五輪仕様。紫がオシャレ



有名なビッグベン。目の前の広場では五輪参加国の国旗が飾られており、開催期間中は連日催し物が開催されていた



ハイドパークという公園で、マラソンスイミング、トライアスロン(スイム)が行われた。訪れた7月31日は、まだ設営中だった



ストラトフォード駅を降りると、そこはもう五輪一色。セキュリティゲートを抜けると、大きな看板とアクアティクスセンターが出迎えてくれた



ジャパンハウスでは、午後から五輪TV観戦も行われて、日本人選手に熱い声援を送る(無料だが、予約が必要だった)



JOCのロンドン五輪での活動拠点となっているジャパンハウスでは、連日メダリストの記者発表が行われた



ピン・トレーディングという場所には、記念ピンバッジコレクターが集まる。どうやら、このおじさんはピンコレクターの有名ならしい



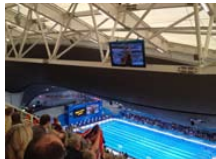
オリンピックパーク内にある、ロンドン五輪の公式ショップである、メガストア。入場するために1時間かかった



世界遺産のロンドン塔の向かい側、タワーブリッジにも五輪、マスコットのマンデルヒと一緒に記念写真を撮る人だにぎわう



アクアティクスセンターを出ると、すぐ右手にはメイスタジアムとオービットと呼ばれる塔が見える



かなり上のスタンドでも見にくいことはなく、逆に全体を見渡せるのでレース展開も分かりやすかった



パーク内のパブリックビューイング。大きなモニターを前に、芝生でくつろぐ人たち。スポーツを楽しむすべてを心得ている

## 第30回オリンピック競技大会(英国・ロンドン) オリンピックを肌で感じた 編集部タサカの回顧録

勝手な

昨年の世界選手権に引き続き、今年はロンドン五輪を編集部・タサカが現地取材。タサカ目線で五輪を振り返る。

文/田坂友暁(本誌編集部)



アクアティクスセンター正面には、大きな五輪のマーク。いやがおうにも気持ちが高まる

### 世界規模で行われた 世代交代と 五輪の特別感を味わって

「五輪には魔物がすんでいる」

使い古された言葉だが、会場に入るとき、本当にそう感じた。歓声の大きさ、入場時の雰囲気、スタート直前の張りつめた空気……。どれをとっても、圧倒されるばかりである。特に、地元イギリス人選手が出場するレースなら、なおさら。昨年の世界選手権で、中国人選手が出場するときにすこぶったのだが、比べ物にならない盛り上がり。ブレ五輪を取材した、中村博之カメラマンの記事で「イギリスはスポーツが文化として根付いている国」とあったが、まさにそのとおりなのだ。

この五輪の魔物にやられた選手がいる。彼らが何個の金メダルを獲得するのか、と事前に注目を集めていた、アメリカのライアン・ロクテとマイケル・フェルプスである。超人と謳われるこの2人ですら苦しめられた、激敵的なレースがある。ロクテの200m背泳ぎと、フェルプスの200mバタフライだ。

ロクテもフェルプスも、100m

150mでいつも一度周りを引き離しかかる。しかし会場にいて感じたのは、余裕を持って引き離すのではなく、余裕が出たがっている2人の姿だった。何とかして150mのターンの前で、周りを引き離そうと躍起になっていた。私には、周りに「離れろ、離れてくれ」と言いながら泳いでいるようにも見たほど。その結果、2人とも125mまでは何とか思い通りに身体半分前に出たものの、150mのターンでは完全に並ばれて、ラスト15mでロクテはタイラー・クラリーと入江に、フェルプスはチャド・レクロスに差されてしまったのである。

逆に、チャドとクラリーは、五輪の魔物を手なづけた。女子100m平泳ぎでレベッカ・ソニを破った15歳のルタ・メルティテ、男子100m自由形で、昨年の世界選手権覇者のジェームス・マグナッセンを下した23歳ネーサン・エドリアン、そして日本の17歳、萩野公介も、魔物を手なづけた選手。五輪の年には、必ず記録も新しい選手も出てくるという。まさにそのとおり、全世界での世代交代が行われたのである。

\* \* \*

これらのレースを生で目の当たりにした私は、感動しっぱなしであった。立つ位置こそ違っても、かつて選手として目指していた場所について、目指していた空気を感ぜられる。ただそれだけで、震えるほどうれしかった。

今回、ロンドン市街とオリンピックパークをゆつくり回る時間も作ったので、足を運んでみた。タワーブリッジやテムズ川にいった主な観光地には五輪があしらわれており、写真を撮る人たちがつた返す。8つの競技場があるオリンピックパーク内は、まさに圧巻。歩いて回るだけでもゆくに1時間はかかるし、メガストアというメインの大きなショップと、各競技場の近くにある小さなショップは、連日入場規制が入るほどにぎわっていた。

老若男女問わず、全世界のさまざまな国がロンドンに集結していった。これは、国々を味わうものなのだ。五輪地でも実感した。この空気を次に味わえるのは、4年後、もうすでに、待ち遠しい。